

思ひ草

第34号

令和3(2021)年1月29日 発行

「探究的な学び」の原点としての「学びの芽生え」

子ども支援学科教授 ^{かみなが}神長 ^{みつこ}美津子



「学びの芽生え」という言葉を知っていますか。幼児教育と小学校教育との接続の説明でよく使っています。初めは、遊びを通しての学びを「無自覚的な学び」、小学校以降の教科等の学習を「自覚的な学び」と言っていました。幼小の教育方法の違いを的確に捉えた表現ですが、ある園長先生が保護者から「家の子は教えればできるので、『無自覚的な学び』ではなく、早く『自覚的な学び』にしてほしい」という要望があったと伺い、受け止め方の違いを知り愕然としました。そのうちに「無自覚的な学び」はあまり使われなくなり、幼児期の学びを「学びの芽生え」と表現するようになっていました。

「学びの芽生え」は、未熟な学びではありません。「学ぶ」ということは、これまで経験し理解していたことが、何らかのきっかけで興味・関心をもって関わり新たな面や新たな関係に気付き、これまで理解していたことと新たな気付きが繋がっていくことです。人は、生涯学び続けます。「学

ぶことを通して、自らの世界を創っていく」という学びの本質は、幼児も小中学生も、大学生も社会人も変わりません。

幼児は好奇心旺盛で、身の回りにある自然や生き物、素材や道具、遊具などの環境やその環境の変化に関心を持ち、自ら働きかけ、様々なことを学んでいます。湿り気のある砂で型押しができることを発見した子どもは、面白くて何度も繰り返す、繰り返す中で型押しの力加減を学んだり、バケツ等の型押しに挑戦したりして、砂の特質を知り学びに向かう姿勢を身に付けていくのです。

このような探究的な学びの背景には、ワクワクドキドキするモノとの出会い、「面白い」「楽しい」という友達との気持ちの共有、「頑張ったね」「なるほど、先生も知らなかった」と子どもを励ましつつ、やり遂げた気持ちに共感し分かち合う教師の存在があります。

探究的学びの原点にあるワクワクドキドキする気持ちを忘れずに学び続ける人でありたいと思います。

鬼のはなし

健康体育学科教授 ^{おおた}太田 ^{なおゆき}直之



最近ではコロナのせいで辛気臭い話ばかりが多いですが、その中で明るい話題といえば『鬼滅の刃』の大ヒットでしょうか。日本歴史を勉強している者として、これを機に多くの人が日本文化に関心を持ってもらえることを願うばかりです。

作中で描かれる鬼は、日本の伝統的な鬼の特徴、人を殺して喰らう人間の天敵といった性格をベースとして、西洋吸血鬼の特徴等を加味したものと言えるでしょう。

これに対して日本歴史の中の鬼は、先述の食人という性格を基盤としつつ、時に疫病を引き起こす疫鬼として神に祀られたり、時には「打出の小槌」のような宝物を人にもたらしたりします。各地の祭礼や民俗芸能には、鬼が悪霊を払い五穀豊穡をもたらす存在として登場しており、こうした多様で重層的なイメージが鬼という存在の大きな特徴です。

ではこうした鬼はいつまで人々に信じられていたのでしょうか。似たような存在の「もののけ」に関しては、中

世まではその実在が信じられていたが、近世以降になると否定的言説が多くなって娯楽の対象へと変化し、近代化の中で完全に否定されていくことが知られており(小山聡子『もののけの日本史』中公新書,2020)、鬼も似たような経緯を辿ったものと考えられます。

戦国時代の公家近衛政家の日記には、京都で鬼が子どもを取って食べるという告げがあったために、七歳以下の子ども達に西国巡礼の格好をさせて清水寺等に参詣させて災いを通れようとしたことが記録されていて(『後法興院記』明応七年[1498]五月十五日条)、この段階で人々が鬼の存在を信じていたことを知ることができます。しかし、江戸時代には桃太郎が昔話の定番として普及し、鬼は娯楽の中で退治される者の代表として位置づけられていきました。

ちなみに、以上のような戯れ言も歴史の卒論として十分通用するものとなります。研究や学問の入口はどこにでもあるので、何にでも興味と疑問をもって取り組んでいきましょう。

教育実習

教育実習という経験

健康体育学科准教授 伊藤 英之 いとう ひでゆき



学生は、教育実習を経験すると、勉強への取り組み方が変わります。もちろん、教職を目指す学生の多くは、元々真面目さと熱心さを持っているため、教育実習を経験する前からしっかり勉強をしています。それでも教育実習後はやはり変わります。

教育実習を経験することは、それまではぼんやりとしていた学校現場や教員の仕事のイメージに、リアリティを与えてくれることだと思います。例えば、教育実習での大きな経験の一つに、授業すなわち実践を行うことが挙げられます。教員にとって授業は正に真剣勝負の場です。真剣に目の前にいる生徒や自身の授業と向き合うからこそ、必死に指導方法の工夫や改善策を考え、授業をしてはまた考える。実践経験を繰り返すことは、自分自身にたくさんの課題を与えてくれます。それと同時に、「授業を行うこと」にリアリティを持たせてくれます。このように、教育実習で学校に身を置くことは、学校現場ではどのような知識が必要なのか、授業を考える上でどんな知識が必要なのか、生徒と関わる上でどんな知識が必要なのかなど、学校という場で責務を全うするために必要なことを現実的に考えることにつながります。これが、「知識を得るための勉強」に目的や活かす場所、活かし方といったリアリティが加わり、勉強への取り組み方が変わるのではないかと思います。

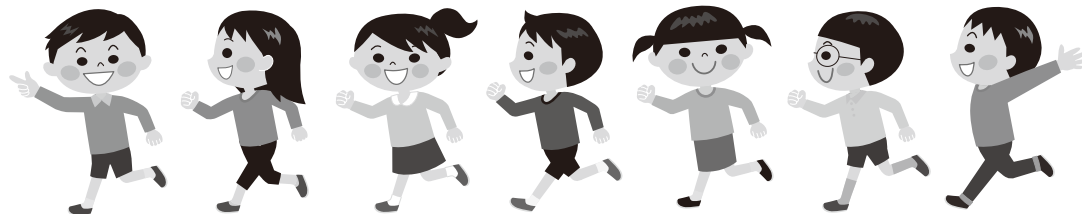
今年度も教育実習の訪問指導をしました。新型コロナウイルスの影響で、教育実習の実施も危ぶまれるような大変な状況の中、実習生を受け入れてくださり、熱心なご指導をして頂きました実習校の先生方に感謝しております。参観しました研究授業でも、やはり真剣に目の前の生徒や授業と向き合う教員の顔をした学生を目の当たりにしました。理論と実践の往還的学び、実習校の先生方からのバトンを再度受け取り、学生のさらなる成長のサポートができるように頑張ろうと思います。

教育実習を終えて

初等教育学科 3年 齊藤 萌楓 さいとう もえか

私が教育実習を終えてまず初めに思ったことは、「絶対に先生になろう」ということでした。実習が始まるまでは楽しみな気持ち以上に漠然とした不安があり、これから始まる1か月の実習が先の見えないトンネルのように思えたことを今でも鮮明に覚えています。しかし、いざ実習が始まると抱いていた不安は消え、目の前の児童に自分なりに向き合う日々が続きました。授業実践や教材研究、児童との関わりはどれをとっても私にとってかけがえのない宝物であり、一生忘れる事のない1か月になったと思っています。

かけがえのない経験をさせていただいた実習の中で、特に思い出に残ったことがあります。それは最終週に行った研究授業です。私の想像していた研究授業は、張り詰めた雰囲気の中で教師も児童もとても緊張した中で行うことであるというイメージがありました。しかしながら、私自身も児童も程よい緊張感の中で楽しんで行うことができたと感じています。そのように行うことができたのは、納得のいく授業になるまで何度もご指導くださった先生方や授業実践でうまくいかなかった時も「楽しかったよ」や「明日も楽しみ」と声をかけてくれた児童のおかげだと思っています。研究授業を終えてたくさんのお褒めの言葉をいただいた反面、これからの課題も見つけることができました。良くできた部分はさらに伸ばし、課題点は改善できるよう大学での学びやボランティア活動を通して主体的に学んでいく覚悟ができました。教員になるにあたり私の前に立ちはだかる壁はこれからもたくさんある事と思います。立ちはだかる壁に挑むことは楽しみな反面で不安な気持ちもあります。しかし、実習を終えて感じた「絶対に先生になろう」という強い気持ちを胸に、周りの人への感謝を忘れずに努力し続けていきたいです。



ボランティア

子どもたちとともに成長した3年間

子ども支援学科 4年 にしざわ かすみ 西澤 香純

私は、保育ボランティアでの体験を通して、一人一人の子どもの思いや気持ちに寄り添うことの大切さを学びました。

最初は子どもとの関り方が分からず、うまく気持ちを立て直すことができない子への対応や、様々に起こる出来事への反応の仕方に悩みましたが、その子の思いに寄り添い、言葉にして気持ちを受け止めること、実際に起こった場面で、大きな動作とともに喜ぶなど全身を使って表現する様子を、先生方がモデルとなって教えてくださいました。

学級での活動や、友達との関わり、生命との出会いなど、色々な場面で揺れ動く子どもたちの気持ちを同じ場で感じながら、一緒に喜んだり驚いたりなど共有した時間は、今、子どもたちと関わる私の基盤になっています。

公立幼稚園の教育を学ぶ機会としてボランティアを経験したことによって、幼稚園教諭になって行いたい私の保育像が少しずつ形作られていきました。また、製作や活動などを実際の様子を思い浮かべながら授業で生かすことができたり、友達と保育の案を共有して、お互いに高め合ったりすることができました。

ボランティア活動を振り返って

初等教育学科 1年 しぶや ひろのしん 渋谷 裕之進

私は昨年11月上旬に、4年生の先輩方と共に宮崎小学校5年生の郊外学習にボランティアとして参加させていただいた。そこでは移動時の安全確認や各クラスとの交流をしたり、焼き芋を焼く手伝いをしたりなど様々なことを体験することができた。そのボランティアで私が最も自分のためになったと思えるのは、4年生の方々と一緒に活動することができたということである。4年生は全員がその時自分がすべきことを考えて動いており、始めに決めたスケジュール以外のことも自ら先生に進言して動いていた。また、活動中にハプニングが起こった際に、私は慌ててしまってどうすればよいのかわからなくなっていたが、先輩方はどうすればここから立ち直れるかを冷静に考え、対処していた。先輩方は大したことはしてないと笑っていたが、私は経験の差がここまで大きく出るのかと驚嘆した。今年も昨年と同様、新型コロナウイルスの影響でボランティアに参加する回数が大幅に減ると考えられる。そのため、一つひとつの経験を大切に自分の将来に繋げていきたい。

就学時健診での学び

初等教育学科 4年 ふじもと ともこ 藤本 智子

私は川崎市立小学校で行われた就学時健診に参加した。就学時健診では、来年度に小学校進学を予定している子供を対象に健康診断や事前指導を行う。私は、就学時健診の最後に行われる保健指導教室への誘導の担当をさせていただき、子供たちが保護者と共に緊張しながら訪れている姿を目にした。誘導をしている際に、担当の先生から、「保健指導では各種手続きだけでなく、担当教員が子供の様子を細かく見ている」と、教えていただいた。しっかりと受け答えができる子、途中で泣き出してしまおう子・・・そうした子供たちの様子をよく見て次年度の指導に役立てるそうだ。私は、今回の就学時健診を通して、多くの職員で次年度に入学してくる子供たちを支えていることや、関わっている教員全員が入学してくる子供たちのことを心待ちにしていることを実感することができた。また、今年教員になる立場として就学時健診に参加させていただくことで、この子供たちが「小学校って楽しいな」と思ってもらえるよう、日々努めていこうと改めて思った。

教育現場を数多く経験する

初等教育学科 1年 にむら めぶき 二村 芽吹

私は大学1年生の9月から横浜市新石川小学校で授業ボランティアをさせていただいています。ボランティアを通して、児童と過ごす時は予想外のことが起こると想定すること、そして、予想外のことが起きた時には、自分が落ち着いて冷静な判断をすることの大切さを学びました。教育現場では予想外の出来事が次から次へと起こります。例えば、私が児童に「静かにしよう」と声をかけたら、児童による「静かにして」コールで余計に騒がしくなっていました。私は、「静かにして」コールに対応することで精一杯でしたが、現場の先生方は全体を見ながら冷静な対応をしていました。ボランティアでの経験は、様々なことが起こる教育現場を知る機会になると思います。コロナ禍の中、貴重な経験をさせていただいていることに感謝しつつ、将来、現場の先生方のように、落ち着いて冷静な判断をしながら、子ども達の良さをたくさん引き出せる先生になれるように、今後も学び続けていこうと思います。

教育インターンシップ

信頼される教師を目指して

横浜市立鴨志田中学校長(93期文学部史学科卒) **濱崎 利司**
はまざき としじ

新型コロナウイルスの影響で、学校現場では様々な“制約・制限”が生じています。また、子どもたちと教職員は、“不安・心配”をもちつつ、日々学校生活を送っています。

然し、そのような中でも先を見て、将来に繋げる取り組みを続けていかなければなりません。それが大学の「教育インターンシップ」であり、「教育実習」です。

私は、これまでインターンシップ生と教育実習生をお預かりしてきました。それは大袈裟に言えば、院友・先輩としての“責務・義務”です。是非今後も校長である限り、受け入れ続けていきたいと思っています。

そこで、皆さんに学校現場が求める人材、そのイメージをこの場をお借りして伝えたい。

まず第一に、子どもたちから信用・信頼される存在であること。第二に先輩・同僚・保護者地域から愛される存在であること。そして、できればICT機器に長け、その教育に寄与できること。今後学校現場で求められるのは、そのスキルをもった人たちです。

まだ先ですが、是非教員採用試験に合格して「横浜市学校院友会」の仲間となってください。副会長(いずれ会長…)としてお待ちしております。

輝いている皆様へ

世田谷区立給田幼稚園副園長 **佐藤 幸子**
さとう さちこ

教育インターンシップに取り組まれた皆様は、たくさんの方のことを体験し、心を揺り動かす日々を送られたことと思います。子どもたちにとって若い先生は魅力的です。それは皆様の一生懸命さ、子どもが好きという気持ち、子どもたちと仲良くなりたい、という素直な気持ちが子どもたちに伝わるからだと思っています。子どもは、自分を受け入れてくれる人、そして自分を肯定的に受け止めてくれる人かどうかを感じる心を持っている、と私は思っています。皆様のその気持ちを大事にしてください。そして子どもと関わった時の揺り動く心と笑顔をいつまでも持ち続けてほしいと思います。感じる心と笑顔は子どもとの関わりの中で何よりも大切なことだと思っています。これからの実習において、たくさんの方のことを学ばれる中で、子どもの心に寄り添った保育の重要性を学んでほしいと願います。幼児と共に生活をする楽しさ、面白さをたくさん感じてください。幼児教育はとても深く学びがあります。皆様が素敵な先生になられ、共に幼児教育に取り組める日を楽しみにしております。

得るもの多き、教育インターンシップ

健康体育学科 2年 **市川 優衣**
いちかわ ゆい

私は教育インターンシップを通して、授業の雰囲気を見たり、生徒と積極的に関わることができたりして、教育採用試験のモチベーションアップに繋がりました。実際に教育現場に出て生徒や学級と関わるというのは、普段の大学の授業では経験することのできないことだと思っています。教育実習では特に自分の専攻している教科がメインになってしまう為、学級に入る時間はどうしても少なくなってしまうと考えられますが、今回は担当のクラスの生徒と多くの時間を共にし、8日という短い期間ではありましたが、実際の教員のイメージを少しつかむことができました。実際に授業をやる立場になった際、どうしても生徒の様子をじっくり観察することは難しいことであるので、今回の実習のように、実際に授業を受ける生徒の様子を見ることが、公務の手伝いというのはとても大切であると感じました。この大変なコロナ禍で教育インターンシップができたことに感謝し、来年の実習やその先に繋げていきたいと思っています。

生の教育現場での経験を通して

健康体育学科 2年 **吉澤 凧沙**
よしざわ なぎさ

私は今回、出身校ではない横浜市立の中学校に体験に行かせていただきました。来年の教育実習を迎える前に、学校現場での体験ができて良かったと思っています。理由としては、まず生徒と関わりを持つ大切さに気付きました。先生方は、授業中やそれ以外でも積極的に生徒たちと会話をしている印象がありました。生徒にとっても先生と話しやすい環境であることが望ましいと思うので、自分も積極的に生徒たちと関わってほしいと思えるきっかけになりました。また、特別支援学級の授業を繰り返し参観したことで、一人一人の生徒との関わりを新鮮に感じるとともに、先生方は個人個人に合った指導をされていることが分かりました。一般の生徒たちとは異なった幅広い教育を体験できて良かったと思います。

最後に、私は体育の教員を目指しているのですが、現在大学で学んでいることが実際の現場で実行されていることを、教育インターンシップを通して肌で感じる事ができて良かったです。